水回り空間をととした主屋と舟屋の関係性の変化について

— 舟屋集落における住居内水回り空間配置の変化に関する研究（その1） —

THE CHANGE OF THE RELATIONSHIP BETWEEN MAIN HOUSE AND BOATHOUSE THROUGH PLUMBING AREA

— A study on the change about the spatial composition of plumbing area in the house located in the Ine coastal village (Part 1) —

縣 真之介 — *1 宮崎隆昌 — *2

キーワード:

沿海集落, 舟屋, 水回り空間, 伊根町

Keywords:

Coastal village, Boathouse, Plumbing area, Ine-cho

Shinnosuke AGATA — *1 Takamasa MIYAZAKI — *2

The study revealed following results about the change of the relationship of the spatial composition of plumbing area in two houses, main house and boathouse, in the Ine coastal village.

Although the connection about a toilet exists, it is a decline tendency. The connection about a bathroom and a kitchen does not exist.

As time passed, two houses become independent each other, because of a addition tendency for a toilet in a main house, a addition tendency for a bathroom in a boathouse and a tendency for a kitchen to be installed in both of two houses.

1. はじめに

1. 1 研究の背景と目的

舟屋集落が存在する京都府伊根町は希有な漁村景観の歴史的・文化的価値が評価され、平成17年7月に重要伝統的建造物群保存地区の指定を受けた。指定を受けた地域の多くは、住居によって構成された生活空間であるため、生活空間の維持・継承が課題となっている。

舟屋集落は断崖と海岸線との狭隘な空間に位置し、一本の道路が海岸線と平行に走っている。その道路を軸として、軸に沿って家屋や倉が軒を連ねており、山側には生活の場として用いられる主屋が立地し、海側には舟の格納庫、出漁準備の作業場、漁具置き場、網干し場、住居を兼ねた舟屋が立地している。居住者の多くは、主屋および舟屋の双方を所有した生活を行っている。

伊根町の生活空間に関する研究は数多く行われてきた¹⁾⁴⁾。しかし、住居空間の水回り空間が、着目されることは少なく、水回り空間について論述した研究は少ない。

本研究は伊根町舟屋集落の今後の環境整備に寄与すべく、住居の重要な構成である水回り空間に着目し、水回り空間配置の変化を把握することを通して、今後の舟屋集落の生活に適した水回り空間配置について考察し、提案することを目的としている。

本報はその基礎的研究として水回り空間をととした主屋と舟屋の関係性の変化について把握していく。

1. 2 研究対象地の概要

本研究の調査対象地区は、伊根町亀島地区とした(図1)。道路を挟んで主屋と舟屋が林立している住居群であることが選定要因である。

以下に水回り空間と関連する上下水道施設の情報をまとめる^{注1)}。

(a) 上水道施設について

- 対象地区である亀島地区は、昭和42年(1967年)に町により簡易水道施設が整備されて給水が可能になった。
- 上水道施設が整う1967年以前は、山水(湧水)を確保し、その水を住居5~10軒の単位で共同に使用していた。また、井戸を所有している家では井戸水を使用していた。

(b) 下水処理施設について

- 伊根町の下水道施設は整備されておらず、尿尿は汲み取りによって処理され、生活排水は昔から隣家同士の間に存在する側溝を通して海へと流している(図2)。

図1 調査対象地区

^{*1} 設計室「空」
(〒380-0823 長野県長野市南千歳1-3-7 守谷第一ビル7階)

^{*2} 日本大学生産工学部創生デザイン学科 教授・工博

^{*1} Architectural Office Sora

^{*2} Prof., Dept. of Conceptual Design, College of Industrial Technology, Nihon Univ., Dr. Eng.

図2 生活排水の流れの例

- ・ 尿尿の汲み取りに関しては、昭和 51 年(1976 年)の廃棄物処理法の改正までは、各世帯にて汲み取りを行っていた。なお、個人にて汲み取った尿尿は畑の肥料等に使用していた。
- ・ 昭和 51 年(1976 年)の廃棄物処理法の改正から、バキュームカーでの汲み取りが行われた。

なお、「尿尿や糞排水は側溝を通して海に流されるが、側溝や磯・浜の掃除は集落総出で行い、重要な集落行事である。」^{注2)}と述べられているように、歴史的に漁村における尿尿処理は海への廃棄によって行われていたと言え、舟屋集落においても、かつては海への廃棄によって尿尿処理を行っていたと考えられる。

2. 研究方法と内容

2. 1 研究手順

水回り空間として着目する空間は「トイレ・風呂場・台所」としている。

主屋および舟屋における各水回り空間の数、および各水回り空間の改修内容を把握することを通して、水回り空間をととした主屋と舟屋の関係性の変化について考察していく。

トイレの数は、便器の数とし、小便器および大便器の区別をせず、それぞれ 1 つの便器とし、換算している。

また、本研究における台所は、日常生活において食事の準備を行うに十分な空間および機能を有しているものとし、舟屋の舟の格納場所付近に設けられた漁獲類の調理に用いる流し台のような外部空間に属している台所は「外流し」と捉え、台所として扱っていない。

2. 2 調査方法と内容

主屋および舟屋の二棟式住居を所有している世帯を対象として住居内の水回り空間の確認と水回り空間の改修に関する住み手へのヒアリング調査を行った。対象とした世帯は道路を挟んで主屋の正面に住み手の所有する舟屋が配置される家屋構成の二棟式住居を所有している世帯とした。

ヒアリング対象者は、世帯主またはその主婦、または世帯主の父または母であり、住居の改修情報を把握している人物とした。また、改修内容の把握のためのインタビューでは、改修前・後の空間、改修による変化の内容、および改修の動機等についての質問を行った。

住み手へのヒアリング調査は、2006 年 8 月から 2010 年 5 月にかけて計 5 回行った。

また、上下水道施設に関する伊根町役場地域整備課へのヒアリング調査は、2010 年 8 月に行った。

伊根町亀島地区 130 世帯のうち、19 世帯を調査し、道路を挟んで主屋の正面に住み手の所有する舟屋が配置される家屋構成の二棟式住居 71 戸（主屋 71 戸、舟屋 71 戸）のうち、19 戸（主屋 19 戸、舟屋 19 戸）の調査を行った^{注3)}。

3. トイレをととした主屋と舟屋の関係性の変化

表 1 は、主屋および舟屋のトイレの数を表している。主屋一階に着目すると、19 戸中 13 戸がトイレを主屋一階に設けており、残りの 6 戸がトイレを主屋一階に設けていないことがわかる。

ここで主屋一階にトイレを設けていない事例に着目し、主屋二階におけるトイレの有無を見てみると、6 戸の内、家屋番号(以下「SN」と表記する) 21 の事例は、主屋二階にトイレを設けている。SN38 の事例は、主屋二階の間取りの把握ができなかったため、主屋二階にトイレを設けているかは不明である。一方、残りの 4 戸 (SN6・8・20・26) の事例は、主屋二階にトイレを設けていない。すなわち、19 戸中 4 戸の事例が主屋自体にトイレを設けていないと言える。ここで、それら 4 戸の舟屋に着目し、トイレの有無を確認すると、4 戸とも舟屋一階にトイレを設けている。

以上より、これら 4 戸の事例には、トイレをととした主屋と舟屋との関連性が存在していると言えよう。すなわち、主屋を中心とし

表 1 各世帯におけるトイレの数

SN	主屋				舟屋				計
	建造年	一階	二階	計	建造年	一階	二階	計	
5	1953	2	-	2	1927	3	-	3	5
6	1941	-	-	-	1951	3	-	3	3
7	1980	2	-	2	1994	1	-	1	3
8	1969	-	-	-	1946	1	-	1	1
9	1969	1	-	1	1985	3	-	3	4
10	1975	1	-	1	1932	1	-	1	2
12	1933	1	-	1	1938	1	-	1	2
19	1998	1	1	2	1946	1	-	1	3
20	1969	-	-	-	1949	1	-	1	1
21	2006	-	1	1	1912以下	2	-	2	3
23	1950	1	-	1	1980	1	-	1	2
26	1937	-	-	-	1994	2	-	2	2
27	1952	1	-	1	1989	1	-	1	2
28	1979	2	-	2	1959	1	-	1	3
35	1909	1	不明	不明	2001	1	-	1	不明
36	1989	1	不明	不明	1954	1	1	2	不明
38	1937	-	不明	不明	1997	1	1	2	不明
42	1950	2	-	2	2000	-	1	1	3
45	1951	1	不明	不明	1927	1	不明	不明	不明

(“-”は、“0”を表している。)

表 2 各世帯におけるトイレの改修内容

SN	主屋			舟屋		
	建造年	改修年	内容	建造年	改修年	内容
5	1953	-	-	1927	-	-
6	1941	-	-	1951	-	-
7	1980	-	-	1994	-	-
8	1969	-	-	1946	-	-
9	1969	-	-	1985	-	-
10	1975	-	-	1932	-	-
12	1933	1976頃	舟屋だけだったため、主屋にも増設。	1938	-	-
19	1998	-	-	1946	-	-
20	1969	-	-	1949	-	-
21	2006	-	-	1912以下	1976	舟屋全て改築および増築。
23	1950	-	-	1980	-	-
26	1937	-	-	1994	-	-
27	1952	-	-	1989	-	-
28	1979	-	-	1959	-	-
35	1909	1989	詳細不明。	2001	-	-
36	1989	-	-	1954	-	-
38	1937	-	-	1997	-	-
42	1950	-	-	2000	-	-
45	1951	-	-	1927	-	-

(“-”は、改修が無いことを表している。)

SN…家屋番号

た日常生活において舟屋のトイレを使用しており、トイレ使用に関して、住み手は、主屋と舟屋の往来を行っていると考えられる。

なお、舟屋一階にトイレを設けている事例は19戸中18戸であり、SN42の事例だけが、舟屋一階にトイレを設けていないが、二階にトイレを設けており、主屋に比べると舟屋にトイレを設ける傾向が強いことがわかる。

次にトイレの改修について把握していく。表2は各世帯における主屋および舟屋のトイレの改修内容を表している。主屋におけるトイレの改修内容に着目してみると、SN12の事例は、「舟屋にトイレがあり、主屋にトイレが無かったため、主屋にトイレを増設した」という内容であり、主屋に新たにトイレを設ける動きがうかがえよう。一方、舟屋のトイレの改修内容を見てみると、SN21が1976年に家屋の全改築を行っているが、トイレのみを改修した事例は存在しておらず、ゆえに舟屋には建造当初からトイレが設けられる傾向が強いと考えられる。

ここで、舟屋に建造当初からトイレを設ける傾向が強いことについて考察すると、二種の要因が推察できる。一つは、トイレの衛生的要因によるものであり、主屋が生活の中心的役割であるがゆえに、生活の中心的役割の場から、衛生面で劣る空間を遠ざけようとする動きがあったと推察される。特に、伊根町は、現在においても下水道施設が整備されておらず、バキュームカーによる下水処理が行われている。バキュームカーによる処理が開始されたのは、1976年以降であり、それ以前は各世帯での処理であった。そのような状況を考慮すれば、1976年以前においては、生活の中心として機能する主屋から距離を置く配置として、舟屋にトイレが設けられたと推察できよう。またもう一方の要因としては、側溝を通して尿尿を海に排水することで処理を行っていた漁村の歴史的な尿尿処理方法が挙げられる。すなわち、尿尿を海へと排水する際の利便性を考慮し、海に近い舟屋にトイレを設けたとも考えられる。

以上のことを考慮すると、トイレをととした主屋と舟屋の関係性は、衛生的要因や下水処理的要因等に基づいた舟屋のみへのトイレ設置によって関連性が生じていると考えられるが、その関連性は、下水処理方法の改善によって、舟屋のみへのトイレ設置の衛生的かつ下水処理的合理性が低下し、住み手の生活上の利便性向上を主た

る要因として生活の中心的役割として機能している主屋内に新たにトイレが設けられることによって、低下傾向を示していると考えられる。

4. 風呂場をととした主屋と舟屋の関係性の変化

表3は、主屋および舟屋における風呂場の数を表している。表3より、調査事例において、主屋に風呂場を設けていない事例は存在していないことがわかる。また、19戸全ての事例が主屋一階に風呂場を設けていることがわかる。

主屋における風呂場の改修内容に着目すると、表4より、主屋に風呂場を新たに設けた改修内容は確認できず、風呂場のシステム化（SN27）や風呂場の配置変更（SN38）といった改修内容から、改修以前においても主屋に風呂場を設けていたと言えよう。

以上のことから、風呂場の使用を通した住み手の主屋と舟屋の往来は存在していない傾向が強く、風呂場においては主屋と舟屋の関連性が存在していないと言えよう。

一方、舟屋について見てみると、表3より、風呂場は、19戸中6戸の舟屋に設けられていることがわかる。また、表4より、舟屋における風呂場の改修内容を見てみると、SN36が、かつて物置であった場所に風呂場を増設している。このSN36の舟屋における風呂場は、1箇所のみであり、SN36の舟屋には増設前には風呂場が無かったと言え、この変化は主屋の補助的役割である舟屋に新たに風呂場を設ける動きと考えられる。なお、この動きは、主屋および舟屋の双方に風呂場を設ける動きと言えよう。

5. 台所をととした主屋と舟屋の関係性の変化

表5は、主屋および舟屋における台所の数を表している。表5より、調査事例において、主屋に台所を設けていない事例は存在していない。また、19戸全ての事例が主屋一階に台所を設けている。

主屋における台所の改修内容に着目すると、表6より、主屋に新たに台所を設けたという改修内容は確認できず、台所周辺の改修（SN23）や台所のオール電化（SN36・38）、および台所の床の改修（SN45）といった改修内容から、改修以前においても主屋に台所を設けていたと言えよう。

表3 各世帯における風呂場の数

SN	主屋				舟屋				計
	建造年	一階	二階	計	建造年	一階	二階	計	
5	1953	1	-	1	1927	-	-	-	1
6	1941	1	-	1	1951	-	-	-	1
7	1980	1	-	1	1994	-	-	-	1
8	1969	1	-	1	1946	1	-	1	2
9	1969	1	-	1	1985	1	-	1	2
10	1975	1	-	1	1932	-	-	-	1
12	1933	1	-	1	1938	1	-	1	2
19	1998	1	-	1	1946	-	-	-	1
20	1969	1	-	1	1949	-	-	-	1
21	2006	1	-	1	1912以下	-	-	-	1
23	1950	1	-	1	1980	-	-	-	1
26	1937	1	-	1	1994	-	-	-	1
27	1952	1	-	1	1989	1	-	1	2
28	1979	1	-	1	1959	-	-	-	1
35	1909	1	不明	不明	2001	-	-	-	不明
36	1989	1	不明	不明	1954	1	-	1	不明
38	1937	1	不明	不明	1997	-	-	-	不明
42	1950	1	-	1	2000	-	1	1	2
45	1951	1	不明	不明	1927	-	不明	不明	不明

（“-”は、“0”を表している。）

表4 各世帯における風呂場の改修内容

SN	主屋			舟屋		
	建造年	改修年	内容詳細	建造年	改修年	内容
5	1953	2003	詳細不明。	1927	-	-
6	1941	-	-	1951	-	-
7	1980	-	-	1994	-	-
8	1969	-	-	1946	-	-
9	1969	-	-	1985	-	-
10	1975	-	-	1932	-	-
12	1933	1977	詳細不明。	1938	-	-
19	1998	-	-	1946	-	-
20	1969	-	-	1949	-	-
21	2006	-	-	1912以下	1976	舟屋全て改築および増築。
23	1950	-	-	1980	-	-
26	1937	-	-	1994	-	-
27	1952	1999頃	風呂をシステム化。	1989	-	-
28	1979	-	-	1959	-	-
35	1909	1979～84頃	詳細不明。	2001	-	-
36	1989	-	-	1954	1968	物置を風呂場と台所に改修。
38	1937	2006	3回目の配置変更（2回目は1977～1978年頃）。	1997	-	-
42	1950	-	-	2000	-	-
45	1951	-	-	1927	-	-

（“-”は、改修が無いことを表している。）

SN…家屋番号

表5 各世帯における台所の数

SN	主屋				舟屋				計
	建造年	一階	二階	計	建造年	一階	二階	計	
5	1953	1	-	1	1927	-	-	-	1
6	1941	1	-	1	1951	1	-	1	2
7	1980	1	-	1	1994	1	-	1	2
8	1969	1	-	1	1946	1	-	1	2
9	1969	1	-	1	1985	1	-	1	2
10	1975	1	-	1	1932	1	-	1	2
12	1933	1	-	1	1938	1	-	1	2
19	1998	1	-	1	1946	-	-	-	1
20	1969	1	-	1	1949	-	-	-	1
21	2006	1	-	1	1912以下	-	1	1	2
23	1950	1	-	1	1980	-	-	-	1
26	1937	1	-	1	1994	-	-	-	1
27	1952	2	-	2	1989	1	-	1	3
28	1979	1	-	1	1959	1	-	1	2
35	1909	1	不明	不明	2001	-	-	-	不明
36	1989	1	不明	不明	1954	1	1	2	不明
38	1937	1	不明	不明	1997	-	1	1	不明
42	1950	1	-	1	2000	-	1	1	2
45	1951	1	不明	不明	1927	-	不明	不明	不明

(“-”は、“0”を表している。)

表6 各世帯における台所の改修内容

SN	主屋			舟屋		
	建造年	改修年	内容詳細	建造年	改修年	内容
5	1953	2003	詳細不明。	1927	-	-
6	1941	-	-	1951	-	-
7	1980	-	-	1994	-	-
8	1969	-	-	1946	-	-
9	1969	-	-	1985	-	-
10	1975	-	-	1932	-	-
12	1933	1977	詳細不明。	1938	-	-
19	1998	-	-	1946	-	-
20	1969	-	-	1949	-	-
21	2006	-	-	1912以下	1976	舟屋全て改築および増築。
23	1950	1979	急傾斜工事の際に、台所周辺を新しくした。	1980	-	-
26	1937	1969	詳細不明。	1994	-	-
27	1952	-	-	1989	-	-
28	1979	-	-	1959	-	-
35	1909	1979～84頃	詳細不明。	2001	-	-
36	1989	2008	オール電化。	1954	1968	物置を風呂場と台所に改修。
38	1937	2006	オール電化。	1997	-	-
42	1950	-	-	2000	-	-
45	1951	1979	土間の台所を改修し、床の有る台所に。	1927	-	-

(“-”は、改修が無いことを表している。)

SN…家屋番号

以上のことより、台所の使用を通した住み手の主屋と舟屋の往来は存在していないと考えられ、風呂場同様、台所においても主屋と舟屋の関連性は存在していないと言える。

一方、舟屋の台所について見てみると、表5より、19戸中12戸の舟屋に台所が設けられていることがわかる。また、舟屋に台所を設けている12戸全ての主屋の一階には台所が設置されている。

このことから、台所に関しては、多くの世帯において主屋および舟屋の双方に台所を設ける傾向が把握できる。

6. まとめ

本報は、伊根湾舟屋集落における住居内の水回り空間配置の変化の把握を目的とし、その基礎的研究として、水回り空間をととした主屋および舟屋の関係性の変化の把握を試みた。

水回り空間をととした主屋と舟屋の関係性については、トイレに関して関連性が見られ、風呂場および台所に関しては関連性は見られなかった。トイレを通した主屋と舟屋の関連性は、住み手の衛生的感覚および海への廃棄による漁村の歴史的尿尿処理等の要因によって舟屋のみにトイレを設けることで生じていると考えられ、その関連性は、下水処理の技術向上に伴う衛生面の改善や尿尿処理技術の向上を契機に、住み手の生活上の利便性向上を主たる要因として、低下傾向を示していると言える。

また、主屋にはトイレが増設される傾向が見られ、更に舟屋には風呂場が増設される傾向があり、かつ主屋および舟屋の双方に台所を設けている傾向が強いことから、総じて主屋および舟屋ともそれぞれが一住居として機能するに十分な水回り空間設備を備える方向への変化(主屋と舟屋の分離化)が生じていると考えられる。

今後は、このような変化構造を踏まえながら、住居の間取りを基に、水回り空間配置の変化について把握していく予定である。

謝辞

調査にご協力いただいた伊根町居住者各位、伊根町役場地域整備課施設整備班水道係小笠原健悟氏、ならびに日本大学にて共同で調査を実施した荻野将志氏、岡田圭介氏、佐藤沢二氏、佐藤仁美氏、中村高広氏、細田明美氏、山口真代氏、青木隆氏、岩崎久幸氏、松

本究氏、八島健介氏、塩田未来氏、中山智史氏、成田裕樹氏、宮崎淳貴氏、柳田裕一郎氏、佐藤佑宇氏、徳山敬汰氏、関野一真氏に感謝致します。また、文部科学省・日本大学より平成20～21年度私立大学等経常費補助金特別補助・大学院重点特別経費・研究科分・学生分の助成を受けた事を感謝致します。

注

- 注1) 上下水道施設に関する情報は、伊根町役場地域整備課へのヒアリングによって得ている。ヒアリング調査は、2010年8月に行った。
 注2) 参考文献5) 引用。
 注3) 亀島地区における二棟式住居の戸数は参考文献1)より算出している。また、亀島地区の世帯数は「2009 伊根町町勢要覧(統計資料編)」による。

参考文献

- 1) 伊根町・伊根町教育委員会：伊根浦伝統的建造物群保存対策調査報告書、2004
- 2) 京都大学漁村建築研究会：伊根町漁業集落環境調査報告書(伊根、新井崎、浦入漁業集落)、1979
- 3) 地井昭夫、鈴木啓二、松永巖、難波祐介、岩崎英精：丹後・伊根浦の研究・序 日本の沿岸漁村における集落構造論の試み、建築、pp.61～76、1969.4
- 4) 地井昭夫、木下明：伊根町の舟小屋と民宿、漁村地域における交流と連携—最終報告—、pp.185～196、2004.3
- 5) 宮崎隆昌：沿海集落の立地と水について、建築雑誌、Vol.94、No.1146、pp.43～46、1979.2
- 6) 牛島朗、菊地成朋：柳川市両開地区の集落形成プロセスと空間構成原理—有明海沿岸地域における干拓村落の展開 その1—、日本建築学会計画系論文集、第73巻、第632号、pp.2125～2130、2008.10
- 7) 栗原伸治、糸長浩司、桑原志乃、川口友子：中国常熟の住空間および地域空間の構成と変化の仕組み—圩子が創出する水環境との関係から—、日本建築学会計画系論文集、第584号、pp.43～50、2004.10
- 8) 岡野崇裕、畔柳昭雄、中村茂樹：沿海多雨・多雪地域に立地する舟小屋を有する集落の生活空間特性に関する研究—生活環境としての集落・民家・生活習慣の成立について その2—、日本建築学会計画系論文集、第526号、pp.131～138、1999.12

[2012年2月16日原稿受理 2012年7月10日採用決定]